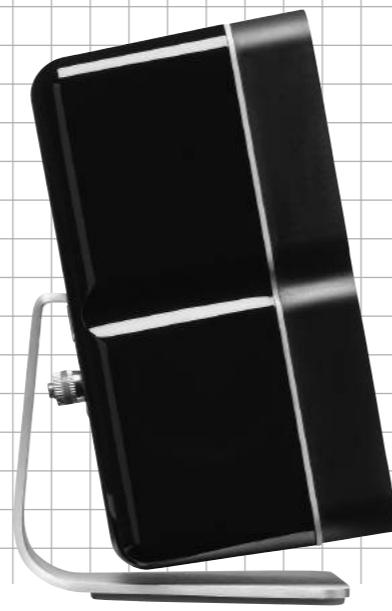


多彩な使い方に対応するケンブリッジオーディオの新Minxシリーズを使いこなす

Min12



Min22



↑約8cm四方のキューブスタイルのコンパクトスピーカー。BMR (Balanced Mode Radiator) という平面振動板を搭載している。上が1ユニットモデルのMin12、下が同口径のウーファーをスタガー駆動で搭載したダブルユニットモデルのMin22。カラーはブラックとホワイトが用意されている

↑背面はスピーカー端子のほか、テーブルスタンド固定用のネジ穴があり、これを利用して丸カンボルトを固定、ライティングレールに本機をセットし、アトモススピーカーとして活用できる。ライティングレールがあれば簡単にトップスピーカーとして使えるわけだ

↑別売りのテーブルスタンド (Minx 600D、¥8,000ペア+税) にセットすると、本体がやや上方を向きデスクトップやローボードに置いたときにちょうどよい角度となる。アクセサリとしては、壁掛け設置が可能なピボット式ウォールマウント金具 (Minx 400M、¥8,000ペア+税) や、スタンドアロンで使えるアジャスタブルスピーカースタンド (Minx CA600P、¥21,000ペア+税) などを用意している



↑スピーカー端子はバナナ端子対応仕様になっており、付属アタッチメントをつけるとYラグや先バラ線の結線が可能

このほか、あらかじめ2.1chや5.1chを組み合わせたパッケージセットも用意されている。

サブウーファーをうまく使いこなすとスケールの大きな再生が得られる

まずはMin12とサブウーファーX201の組合せによる2.1ch再生を試してみた。クロスオーバー周波数はやや低めの80Hz。これはコンパクトなMin12の素性を知るため。「SHANTIS LU [LABY]」から、「アクロス・ザ・ユニバース」のハイレゾファイルを聴いてみると、鮮やかな声がきれいにスピーカーの中央に浮かび上がった。スピーカーの間隔は2mあまりで、サイズからするとやや広いと思っていたが、ヴォーカルの音像が薄まることもなく、広々とした音場が展開した。ギターの伴奏の胸鳴りはやや小ぶりになるものの、レスポンスのよさと音色の鮮明さもあって大きな不満を感じない。

Minx

サイズを超えた
凄いアトモスサウンドが出現!

by Cambridge Audio



英国・ケンブリッジオーディオから独自のBMRドライバーを一新し、実力を高めた、新Minxシリーズが登場。

コンパクトさを活かして柔軟なシステムに対応するこのシリーズを、ステレオ再生からサラウンド再生までさまざまな構成でテストした。

どれほど実力を高めたのかテストするのはもちろん、セッティングによる音の変化や

サブウーファーとのクロスオーバー周波数の調整など、使いこなしも含めてレポートする。

鳥居一豊

約8cmの立方体サイズのMinxシリーズは、コンパクトさとワイドな指向性を活かし、自由なレイアウトで使用できるサテライトスピーカー。すでに本誌視聴室で天井に取り付けるトップスピーカーとして活躍しているので、ご存じの人も多いだろう。そのMinxシリーズが新設計された第4世代のBMRドライバーを搭載してモデルチェンジ。大型のネオジウム磁石の採用と、BMRドライバーの振幅を2.2mmからほぼ倍となる4mmに拡大し、より豊かな音の広がり、全帯域でのレスポンスの向上を実現した。スピーカーシステムのラインナップは、フルレンジ構成のMin12、ここに低音用にカスタマイズしたBMRウーファーを追加し、立方体のボディがふたつ重なった形となるMin22の2モデルだ。

これに組み合わせるサブウーファーとしてX201、X301の2機種も同時発表された。こちらは、主にDSP回路のチューニングを見直し、高効率化と低音再生能力の向上を図っている。こちらもサイズはコンパクトで、X201は口径165mmのウーファー1基(正面)とパッシブラジエーターを2基(側面)内蔵。X301は、口径203mmのウーファー1基(正面)とパッシブラジエーター1基(底面)の構成だ。これらはそれぞれ単独購入可能で、2.1ch構成から7.1ch構成、ドルビーアトモスの7.1:4など、多彩なシステムを構築できる。

多彩な使い方に対応するケンブリッジオーディオの新Minxシリーズを使いこなす

	Min12	Min22
実勢価格	1万4000円前後 (1本)	2万2000円前後 (1本)
型式	フルレンジスピーカー・密閉型	2ウェイ2スピーカー・密閉型
ユニット構成	57.15mm平面型フルレンジ	57.15mm平面型フルレンジ +57.15mm平面型ウーファー
出力音圧レベル	86dB/2.83V/m	88dB/2.83V/m
インピーダンス	8Ω	8Ω
寸法	W78×H78×D85mm	W78×H154×D85mm
質量	430g	850g

	X201	X301
実勢価格	6万円前後	8万円前後
型式	165mmコーン型ウーファー+ 165mmパッシブラジエーター x2	203mmコーン型ウーファー+ 203mmパッシブラジエーター
アンプ出力	200W	300W
クロスオーバー	50Hz~200Hz	50Hz~200Hz
寸法	W210×H219×D222mm	W266×H311×D278mm
質量	5kg	7.5kg

●問合せ先：(株)ナスベック ☎0120-932-455

最後は、ここにMin 22×4個をトップスピーカーとして配置した5.1・4構成でドルビーアトモスに挑戦。視聴したのは生々しいまでの銃撃やスピード感たっぷりのアクションが満載の「エクスペンダブルズ3」。冒頭の列車で護送される仲間を救出する場面で、上



ドルビーアトモス再生対応5.1.4システム
Min12 (C、LS/RSとして3本使用)
Min22 (L/R、Top Front L/R、Top Rear L/Rとして6本使用)
X301 (LFE)

- 視聴に使った機器
- ディスプレイ：東芝50J10
 - プロジェクター：ソニー VPL-VW1100ES
 - スクリーン：オーエス ビュアマットⅢCinema (120インチ/16:9)
 - BDプレーヤー：パイオニアBDP-LX88
 - AVセンター：デノンAVR-X7200W

アトモス再生にもぴったり 迫力と臨場感が存分に味わえる

さて、ここからはサラウンド再生を試してみる。フロントはMin22のまま、センターおよびサラウンドにMin

と回り以上大きくなる。中低音域のさらなる充実というよりも、全体的なエネルギー感がさらに増した感じで、SHANTYの声を張ったときの力感や歌声の存在感が大きくなる。もはや小型スピーカー+小型サブウーファースのコンビとは思えないスケール感だ。

12を、サブウーファーにX301を變更した5.1ch構成で聴いてみた。スピーカーの間隔は120インチのスクリーンに合わせて2mほどに広がっている。まずは、伝説的英雄の真の姿をリアルに描いた「ヘラクレス」。冒頭で伝説として語られる「12の難業」の場面を見たが、声はクリアで発音も明瞭。X301は、しっかりとした質感が備わっており、映画には欠かせない量感豊かな低音を力強く再現した。水蛇のヒュドラの鳴き声や巨大な猪が猛然と迫ってくるときの地鳴りのような足音など、絶対的な

空から迫るヘリの威圧的なローター音に身がすくむ。上半球を含む空間の包囲感はいわゆる良好で、後半の廃車の内外で展開する激しい戦闘では、戦車の砲撃で空気が震える感じがすさまじい。

ドルビーアトモスらしい上質な空間が再現され、定位の明瞭な音があらゆる方向から飛んでくる。破壊されたビルがまき散らす瓦礫の雨などは思わず身体が避けてしまうほど。攻撃ヘリ同士の空中戦も互いの位置を音でも正確に再現し、アクロバティックな飛行ではま

鮮明な音で、勢いやエネルギー感がさらに高まった新Minxシリーズは、トータルシステムとしての完成度がさらに高まったと思う。もちろん、サラウンドスピーカーやトップスピーカーとしての魅力もさらに高まった。さまざまな使い方に柔軟に対応する活用範囲の広いモデルだ。

X201



X301



↑新Minxシリーズのサブウーファーもモデルチェンジ。デジタル信号処理のチューニングを変更し、ユニットの過負荷や歪みを防ぐことで、小サイズながら強力な低音を生み出したという。ラインナップは、X201とX301の2機種で、いずれもパッシブラジエーター方式のエンクロージャーを採用している。サブウーファーのカラーはブラックおよびホワイトの2種類となる



↑X301のリア端子部。クロスオーバー切り替えは連続可変式で、Min12とMin22のアイコンがあり、それぞれの機種と組み合わせた場合の目安となる。なお、クロスオーバーのバイパスポジションは装備していない

じさせない。

続いて、ステレオサウンドのハイレゾリューションから『モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第四番』を聴いたが、オーケストラの楽器の編成が見えるようなステレオ感と個々の楽器の音が粒立ちよく描かれる様子はなかなかの出来。やや高域優勢の明るめの傾向で、楽器の音色の違いもよく表現できていて、カラフルな印象だ。

ここで、サブウーファースのクロスオーバーを変更してみた。X201には背面に音量とクロスオーバーの調整用ダイヤルがあり、クロスオーバーにはおおまかな周波数の数値と、Min12、Min22の推奨位置をイラストで表示している。ここでは、Min12の推奨値である150Hzくらいのところにしてみた。再生してみると、SHANTYの声の厚みが増し、ギター

になってくる。高域寄りと感じたバランスもちょうどいい感じになり、腰の据わった安定感のある再現となった。サブウーファーは右側に置いたのだが、ベースやドラムの響きが右に片寄るようなことはほとんどなかった。

今度は、Min12を別売テーブルスタンドを使って設置してみた。すると、オーケストラの楽器の配置がより明瞭になり、少々物足りなかつた奥行感も豊かになった。上原ひろみの「Alive」を聴いても、やや気になっていたドラムの素早く刻むリズムのたたつきが多少改善された。中低音の明瞭度が大きく向上し、鮮明さに加えて解像感の高さも出てきた。コンパクトなスピーカーはついそのままラックやテーブルなどに置いてしまいがちだが、テーブルスタンドを使った方が、持ち味を活かせるだろう。



続いて、サブウーファーが再生する低域をもう少し締めるため、足元にインシュレーターを追加した。クリプトンのハイブリッドインシュレーター、ISHR50を底面の四隅に配して設置してみると、「Alive」でのドラムの打音やピアノの低音パートの音のキレ味がよくなり、ベースもグッと前に出てきた。最低域に近いところはどうしてもあいまいになりがちだが、音楽を推進させ

るリズムはしっかりと芯が描かれるようになる。サブウーファースのX201を使いこなすポイントは、足元を固めることにあるといえそうだ。

ここで、スピーカーをMin12からMin22に変更して聴いてみた。サブウーファーはX201のままだが、クロスオーバーは推奨値である120Hzからやや高めめのポジションとした。その違いはかなり大きく、音楽のスケール感がひ